

宮古漁業用無線局

港を出れば陸上との連絡は無線通信しかない。船長（航海士）と機関士それに無線通信士は、必ず乗船しなければ出航してはならない規則になっている。

船の大きさに応じた資格を持っている者でなければならぬ。自動車運転免許のようなものである。船の無線通信士は別に船舶通信士の資格（海技免許）が必要だった。

初めて乗った第二磯丸には、出力二十五ワットの無線機が一台しか設置していなかった。近海だけの底引きトロール船で、朝出航して夕方港に帰る。A1（電信）A3（電話）を切り替えて使用していた。

その年のお盆に私が盲腸になり宮古病院で手術したが、船長の加倉さんが付き添ってくれた。通信士が居なければ出航できない。約十日間、私の為に若者達は長いお盆休ができて喜んだようだ。

その年の秋、別会社の少し大きい漁船の第八有漁丸に乗り換えた。メイン送信機が出力五十ワット、予備が二十五ワット、受信機も二台装置してあった、出港して一週間から十日間くらい漁場で漂泊、操業を続ける。

北海道釧路沖の操業が多い。厳寒の海は辛くて危険であった。一冬だけ北海道沖トロール船で働いたが、春になって又転船した。宮古で船舶無線機の取り付けや、保守、船の発電機など、営業していた三和製作所の社長、紺野さんに、釜石港所属は大洋漁業株



式会社第十二あさひ丸を紹介して貰った。

第一二あさひ丸は延縄（はえなわ）船で、鮪、梶木（かじき）を漁獲する船で、乗組員は二十一名だったと思う。

少しでも給料の多い船に乗り換えるのが常等手段。私も少しづつ給料が増えてきた。近海で操業していたが、翌年の春、船団を組んで、赤道直下のまぐる漁に参加した。

翌年同じのは第七あさひ丸に社命で転船。所帯を持っても充分な暮らしが出来ると思い、父の目に叶った、“なか”と婚約し翌年結婚した

宮古漁業用無線局は、宮古・釜石所属漁船の操業や動静を毎日夜一回漁業放送していた。周波数は2785キロサイクル、（現在はキロヘルツ）だったと記憶している。

船員の留守家族は、毎日欠かさず時間になると特別製の受信機で聞く。宮古近辺は簡単な装置で聞こえる、放送で無事を確かめているのだった。

『JHT JHT . . . 只今より漁業放送を始めます』

「. . . 丸は東経. . . 度. . . 分、北緯. . . 度. . . 分、天気晴、南南西の風、風力三、第. . . 回操業中」

「. . . の風強く支え中」 「波穏やか漂泊中」

「満船になり帰港中」 「. . . 日. . . 時. . . 分. . . 港入港の予定」等と放送していた。

入港予定を聞き、岸壁で待つて居る。船団を組んで出漁すると早くて半年は帰つて来ない。毎日の漁業放送を聞かなければ、気が安まらない。

私も結婚後、漁業放送が聞こえる受信機を作った。蔵王は宮古より遠い、電波も微弱だ。あの当時は真空管式、スーパ―ヘテロダイナ方式。聞こえてきた時は嬉しかった。

妻は放送時間になると、仕事を止めダイヤルの目盛りを合わせ、毎日欠かさず聞くと話していた。

昨日その話をしたら、夏は農作業をやめ、冬は台所仕事の手を休め、聞いて安心したと話してくれた。